

アントニ・ガウディ

「神は急いでおられない。焦らなくていい」

01. 浅草のサグラダファミリア

人々がサグラダ・ファミリアに惹きつけられる要因はフォルムの有機的な造形美だけではなく、「建てること」そのものが様々な価値を生産しているからだ、私たちは考える。「建てること」は一つの大きなイベントであり、スペクタクルであり、アトラクションである。「建てること」は多くの雇用を生み、ヒト・モノのネットワークを形成し、資本の循環を作る。「建てること」のもつ付加価値は、祝祭性と産業化、この2つの特性を持つ。私たちはサグラダ・ファミリアのもつこの構造的側面に目し、サグラダ・ファミリア的「状況」をここ浅草で構築することを目指す。

02. 建築し続けることのダイナミクス

建設の機械化・合理化が進んだここ日本で、「建てること」を目の当たりにすることはなかなかできない。しかし、仮開いの向こうの建設途中のビル、どれだけかつこいいいことか！！建物を作るということは、とてもかつこいいことなのだ。ワクワクすることなのだ。建設すること、そのダイナミクスには、人々を呼び寄せる力がある。だから私たちは、仮開いのくびきから建築を解放し、建設の持つ祝祭性を復活させる。建物は完成した瞬間に、古くなっていく存在だ。でも私たちの提案する建築は、「ずっと作り続けられていく」建築である。行くたびに、見るたびに最新の状態へとバージョンアップされている。そんな「ヌーヴォー」な建築だ。



03. コンセプト — “slow construction”

仮開いというブラックボックスの中でいつの間にか完成してしまう今のオフィスビルとは対照的に、100年を越えて作り続けられ、その作り続けられる様を皆で共有できる建築を提案する。この建築は浅草の新たな「伝統行事」となるとともに、建設コストの分散、建物価値の漸次的な増加といった「ビルディング」としての新たなコンセプトを世界に表明する。中心に大きな穴の空いたストラクチャーに、大中小のクレーンを設けるというのがこの建築の基本的な構成である。あたかも五重塔における心柱がクレーンに置き換わったような建築で、中心の「お堂」で作られた部材は、このクレーンにより建物全体へ散らばっていくのだ。

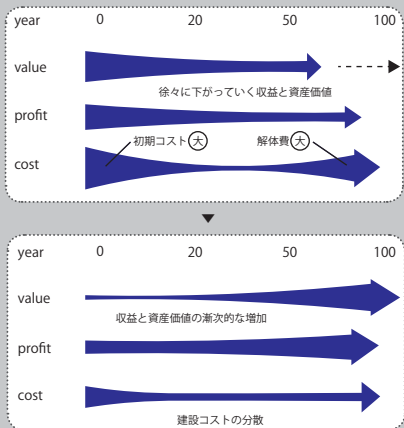


04. 建設の3段階 - 幼年期, 成年期, 老年期 -

本計画は、大きく区分して3段階のフェーズを持つ。①幼年期は建設開始から20年目までの期間を指す。まず建ち上げるのは全ての始まりである原・ストラクチャーだ。これは工期を短縮するためできる限り構成材の数を減らした一つまり構成材を極限まで肥大化させた一架構で、土木構造物用の巨大なPC材を使用している。原・ストラクチャーを足がかりに上層階からスラブを挿入していくのだが、このスラブと簡単な設えができたフロアから早々にオフィスとして貸し出すこととする。このとき、建設資材を環境装置として使うことで「作りつつ使う」ということを可能にしたい。建設段階から収益を生むビルディングの提案。②成年期は20年目から50年目までの期間である。完成した鉄とコンクリートの架構を長い時間をかけて木質化していく。日本の伝統的な木造建設技術を再構成し、さらなる発展・伝承をするための場となるだろう。③老年期では原・ストラクチャーの老朽化が問題となる。ここからは原・ストラクチャーを部分的に解体し代替する架構を挿入していく工事に入る。バラバラな架構が有機的に連関することで、全体の構造的安定を保つ。本計画は建設開始から50年間で、約40回の上棟式を予定して。上空に浅草の名物お菓子が大量に舞う、大愛おめたい儀式である。

05. 価値が上がり続ける建築

通常、建物は完成した瞬間から価値が下がり続ける。そして、減価償却のあつつきには建物の価値はゼロになつてしまい、さらには解体に莫大なエネルギーが必要に…。これが多くのオフィスビルの現状である。本提案はそのような都市部のオフィスビルのあり方に異議申し立てをおこない、そのオルタナティブを提案するとともに、新たな事業収支モデルを発案するものである。



06. 環境装置としての建設資材

私たちは建築資材を、快適な環境をパッシブに作り出すための装置として使うことを考えた。具体的には単管足場や養生シートで日射や風をコントロールし、騒音をシャットダウンし雨を防ぐためにブルーシートを有機的に絡み付け、快適な半屋外空間を生み出すため落下防止壁を駆使した。これらはシミュレーションにより最適な状態を導き出し、形態と配置の仕方を決定していった。作ることで使うこと、その両方に適した環境を同時に作ることを目指している。

